神奈川県考古学会

考古かながわ 第2号

1992年3月30日

偶　　感

青山学院大学名誉教授
吉田　章一郎

先日、秦野市の桜*土手古墳公園の展示室に行った時、最近、同市内の遺跡から発掘された遺物が展示されているのを見ることができた。

その中に、同市下大槻開戸遺跡から出土した縄文時代中期の硬玉製大珠と、琥珀の玉があった。これを見ていた時に、昭和26年、昭和27年頃に北海道の調査に参加した時のことを思い出した。

当時、東北地方や北海道で発見された硬玉製の飾玉について、その原産地をめぐって、それが新潟県糸魚川市の小滝川流域にあることが判ってきて、その製作遺跡も発見されてきた頃でもあり、縄文時代における物の流れが広い範囲に及んでいることが明らかにされつつある時期でもあった。

その頃、恩師である故駒井和愛先生から、ヨーロッパ考古学で、先史時代の交易、文化の交流を論ずる時に、常に触れられる“琥珀の道”(Amber　Route) のことを教えられた。

琥珀はバルト海沿岸を原産地として、オーデル、エルベなどの川に沿ってのぼり、ドナウ川沿岸を経て、アドリア海に出て、ミケーネ文化圏に至ったというのである。

またその頃は、北海道、東北地方で、いわゆる環状列石が発見され始めた頃で、それが中国大陸の北方にみられるストーン・サークルと関係があるのではないかという意見や、日本の縄文文化の中で考えるべきであるというような意見が出されていた頃でもあった。

その頃からもう40年も経っているが、まだ昨日のようなことに思われてくる。地域の考古学を考える時、どうしても縦の線が中心になって考えが進められることが多くなるが、横の線もけっして見のがしてはならない。場合によっては、この線のほうが地域の文化を解明するのに重要なことになるのではないかということを、これらの遺物を見て、改めて考えさせられたのである。

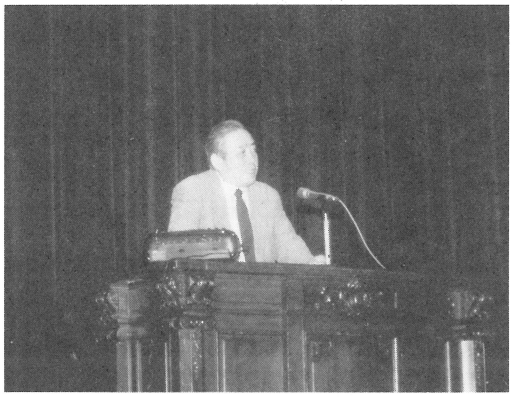
(＊秦野市立桜土手古墳展示館；本号P.8<施設案内>参照)

第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催される

神奈川県遺跡調査・研究発表会は、県内で発掘された遺跡の中から注目されるものを選んで毎年１回開かれており、今回は去る９月29日(日)、横浜市教育文化ホールで開催された。これまでは県内の考古学研究者で構成する「発表会準備委員会」が各地の研究者・研究団体の協力を得て開催に当たってきたが、昨年４月に神奈川県考古学会が設立されて準備委員会は発展的に解消し、今回からは県考古学会の主催となった。会は神奈川県教育委員会及び横浜市教育委員会の後援と、横浜市埋蔵文化財センターの協力を得て約400名が参加する盛況ぶりであった。

発表は近世から始まり、時代をさか上って旧石器時代に至る県下各地の11遺跡が報告され、間に岡本勇横浜国立大学講師の特別講演が行われた。

愛甲郡清川村宮ケ瀬遺跡群の長福寺址では、近世寺院址内に県内では初めての梵鐘鋳造遺構が見つかった。国史跡の元箱根石仏・石塔群は保存整備のために初めて試掘調査が行われ、当初の様子が判明した。鎌倉市由比ケ浜中世集団墓地からは、密集する方形堅穴建築址、墓壙、井戸などと、陶磁器類を中心とする数多くの遺物が発見された。茅ケ崎市石原Ｂ遺跡では、平安末期の建立とされる鶴嶺八幡宮の現参道下に古参道と鳥居の根の部分が残っていた。県史跡川崎市馬絹古墳は、複室構造の横穴式石室を有する終末期の円墳で、現在、保存整備のための総合調査が行われており、電気探査やレーダー探査で、茸石が墳丘中腹をドーナツ状に周ることや、石室が厚さ30cm前後の板石を使って築かれていたことなど、新たな事実が明らかになった。横浜市富士山古墳は径29m程の円墳で、人物、馬、鳥などを含む100個体以上の埴輪が出土した。綾瀬市神崎遺跡は弥生時代後期の環濠集落であるが、出土土器の95％以上が東海西部系であることからコロニーと考えられる。逗子市池子の米軍基地内では弥生時代中期の旧河道が調査され、中期後葉の土器、石器、骨角器とともに農具、容器、機械具、籠など多種多量の木器類が出土した。この他、以前に調査された当麻遺跡（縄文中期）の続きを検出した田名花ヶ谷戸遺跡を含む相模原市田名塩田原遺跡群、縄文時代草創期の隆線文土器と表裏縄文土器がまとまって出土した藤沢市柄沢遺跡群１－Ｅ・Ｆ地点、後期旧石器時代の西日本系ナイフ型石器や墓壙とみられる土壙が検出された綾瀬市上土棚遺跡群などが報告された。



特 別 講 演

岡本勇氏の特別講演「港北ニュータウンの調査と遺跡群研究」は、自ら団長として取り組んでこられた20年に及ぶ広域調査の成果を、縄文集落と弥生集落にしぼって総括された。

なお、発表の詳しい内容については、神奈川県考古学会から「発表要旨」（Ｂ５版51頁）が刊行されているので参照いただきたい。

また、第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会は、本年10月４日(日)に横浜市開港記念会館にて開催の予定である。

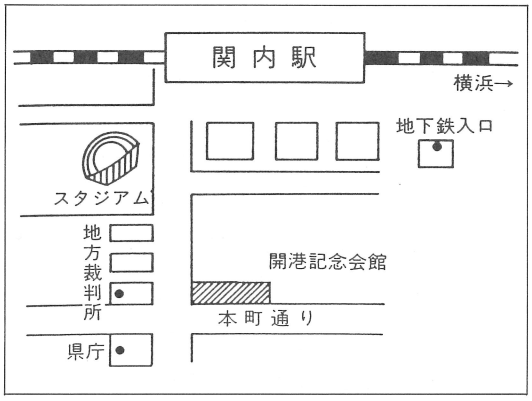
総会のお知らせ

1992年度の総会を下記のとおり開催いたします。

○日　時　1992年5月3日(日)　13:00〜

○場　所　横浜市開港記念会館
　　(横浜市中区本町1－6)

○議　事　(1)　1991年度事業報告
　　(2)　1991年度収支決算報告
　　(3)　1992年度事業計画案
　　(4)　1992年度予算案
　　(5)　特別講演会



『考古論叢　神奈河』創刊号

神奈川県考古学会の大きな事業のひとつに、雑誌の刊行が企画されております。

もちろん内容的には、神奈川県及びそれに関連するテーマの学術情報の発進が中心になります。しかし、この雑誌は会員全員のものであります。従いまして、原稿は学術的な論文にかぎらず、身近にある資料の紹介や日頃思っている研究上のヒントをメモしたものなどもおおいに歓迎いたします。会員の皆さんの投稿をお待ちしています。

創刊号には、次のような論文が掲載されております。

刊行にあたって……日野一郎
かながわの考古学をきずいた人たち［神奈川県考古学会発会記念講演録］……岡本　勇
ナイフ型石器の型式学的基礎研究……服部隆博
甕のような高杯……西川修一
弥生時代の石皿と磨石……浜田晋介
中世，14世紀かわらけの変遷……宗臺秀明
資料紹介・鎌倉市岩瀬上耕地遺跡出土の明代青花磁器……継　　実

以上のとおり、旧石器時代から中世にまたがる期間の論文など力作ぞろいです。B5版の110頁前後で、刊行は1992年5月になります（総会には、間に合うように頑張ります）。ご期待下さい。頒価は、会員特典で1800円、会員外には2300円を予定しています。

1991年度役員会記録

第1回　1991年7月5日(金)
　会場　神奈川県立埋蔵文化財センター研修室
　義題　○役員の役務分担と運営方法
　　○1991年度事業計画の実施　他

第2回　1991年10月18日(金)
　会場　神奈川県立埋蔵文化財センター研修室
　義題　○遺跡調査・研究発表会の結果報告
　　○見学会の開催予定
　　○「考古かながわ」創刊号報告　他

第3回　1992年3月5日(木)
　会場　神奈川県政総合センター会議室
　義題　○講演会の開催について
　　○学会誌「考古論叢　神奈河」編集状況
　　○今年度下半期事業報告
　　○新年度事業計画　他

他に1992年1月9日(木)に各運営委員会の責任者と総務委員会による企画準備会議が開かれました。

横浜市富士山（ふじやま）古墳

佐藤安平・伊藤　郭

Ⅰ．富士山古墳は、横浜市戸塚区上矢部町332－1番地他の株式会社橋本フォーミング内に所在している。この地点は、ＪＲ東海道線戸塚駅の北方約２㎞で、柏尾川と阿久和川が合流する南岸の独立丘陵状先端部に当る。先端部の標高は約55mを測り、東側沖積地との比高が約38mである。

発掘調査は、橋本社が敷地内に研究所を建設する計画にもとづいて、1989年８月から翌年４月まで断続的におこなった（発掘面積約800㎡）。

Ⅱ．発掘調査は、墳頂部を基点とした十字形のトレンチ発掘から着手した。それぞれの墳端付近から埴輪が出土したため、全面発掘にとりかかる一方、主体部の追求もおこなった。主体部は、墳頂部の精査にもかかわらず確認できなかった。

伝承によれば、この丘陵は「富士山」と称し、墳頂部に長崎四郎なる侍が富士庵という建物を構えていたという。これが事実ならば主体部は、建物を造る際に削平されたものと思われる。なお、墳頂部から室町期と思われる五輪塔（地輪）１個と寛永通宝１枚が発見されている。

周溝は幅２～2.5m深さ50㎝前後の規模を有し、西から南側一帯と北側の一部分で検出され、全周していない。古墳の大きさは、周溝の円周からみて径29m程、現高２m程の円墳と推定しているが、形状については断定できない。

Ⅲ．古墳に関する建物は、墳頂部攪乱層から碧玉製管玉１個の他がすべて周溝内出土の土師器片と埴輪片である。土師器片は数個の細片で、時期決定には困難である。埴輪片はおびただしい数量である。その種類は、円筒埴輪100個体以上（朝顔形６個以上を含む）、人物埴輪６体、鳥形埴輪３体、馬形埴輪１体である。

これらの埴輪の出土状態は、その大半が墳丘から周溝内へ流入したもので、多量の円筒埴輪に混在して少量の形象埴輪が点在していた。西溝は特に破片が集中し、あたかも破砕して投げ拾てたと思える状態であった。南溝は、完形ないし半完形の円筒埴輪が一定の間隔で横倒し状態で出土し、その中に馬形埴輪がやや東寄りの

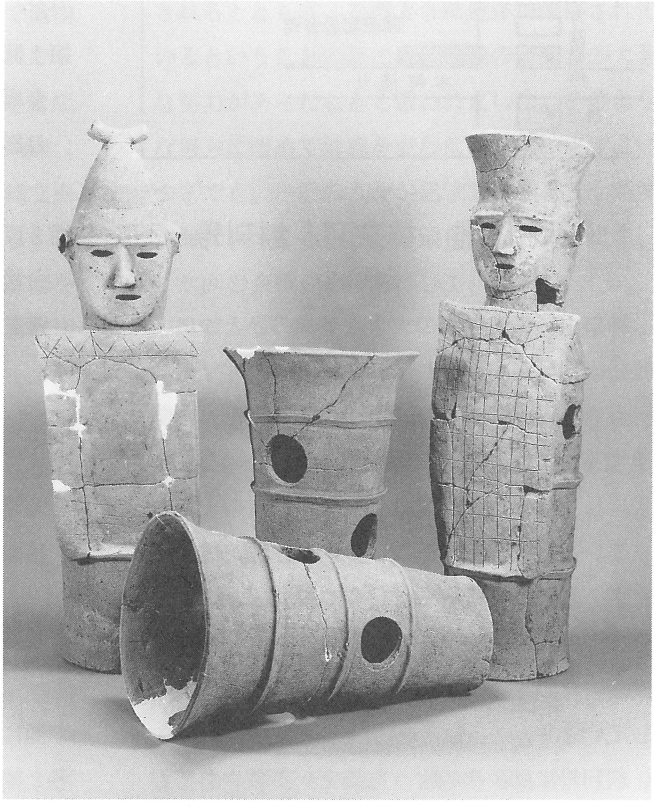


写真１．人物・円筒埴輪

周溝内から横位で発見された。一方、北側では、周溝のやや上方の等高線に沿って集中して円筒埴輪片が出土していた。その中には、正位の状態のものもみられたが形象埴輪は混在していない。なお、北東・北西部には周溝が検出されず、埴輪片もほとんど出土していない

Ⅳ．各種の埴輪の概要を紹介すると、人物埴輪はその形状によって２種類に大別される。１類は、器高70㎝程の盾持人４体（写真１）と２類が小形で顔面だけの２体である。１類の盾持人は頭部に特徴があり、先端に棒状の飾りを付けた円錐形の帽子タイプ（Ａ）とラッパ状の開口頭部のタイプ（Ｂ）とに分けられ、それぞれ２体づつある。顔は、顎から両頬にかけて鍔状に粘土板を貼り付けて顔面を造り出し、その内部に眉と鼻を直線的に粘土を貼り付けている。目と口はやや鋭く細長く切り取り、耳は約１㎝円形に突出して内部は孔になっている。盾は、ともに上端がやや広がり、両側面と上端が鍔状に張り出している。大きさはＡが30×19㎝、Ｂが35×18㎝の長方形で、その上面には鋸歯文や格子目文をヘラ状工具で描いている。これらは、胴部から頭部まで円筒を基本にして一連の製作で、焼成も良く硬質に仕上っている。２類の小形で顔面のみの埴輪は、ともに大きさ８㎝の顔面を有している。一つは、頭部が横に広がる扁平状の開口頭部であるが、顔面の大半が欠損している。二つは頭部欠損であるが、顔面に朱が塗られている。

円筒埴輪（写真１）は、規格品かのように大きさ・形状とも共通点が大きい。器高はいずれも41㎝程で、突帯が３本、透孔が直交して２対みられる。

鳥形埴輪（写真２）は、左側が嘴（くちばし）からみて鷹（たか）、右側がいわゆる水鳥と思われる。鷹は突帯１本の円筒の上に乗り、現高37㎝を測るが、円筒下部が欠損している。透孔は突帯の上下に平行して２対みられる。水鳥は胴下半部以下を欠損し、現高18㎝である。なお、両者とも頸部と胴部がソケット式の接続である。

以上の他に、馬形埴輪が１体出土している。腹部から足を欠損し、表面の轡、胸繋（おもがい）、鞍などが剝落しているが、いわゆる飾り馬である。なお、鼻先から尻までの長さは68㎝を測る。

この古墳の築造年代は、埴輪の調整技法や突帯、透孔などの形態からみて、６世紀中葉頃と推定している。

写真２．鳥形埴輪

（参考）

⑴　佐藤安平・伊藤　郭　「横浜市戸塚区上矢部町富士山古墳調査概要」　上矢部町富士山古墳調査団　1991年５月

⑵　佐藤安平・伊藤　郭　「横浜市戸塚区上矢部富士山古墳」　第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨1991年９月

貝塚探訪記
―第１回遺跡見学会に参加して―

中村　隆

『三浦半島の縄文時代の貝塚』を案内していただいたのは、長雨の合間の、久々に穏やかな日差しに恵まれた10月19日㈰でした。ＪＲ久里浜駅に集合した参加者は50余名。

岡本勇先生の挨拶の後、大塚真弘氏の先導で、ＪＲ久里浜駅から歩くこと20分。縄文時代の人々も通ったかと思われる細く急峻な坂道を上りきった丘に、県指定史跡『吉井貝塚』はありました。縄文時代の貝塚（早期～後期）の他に、弥生時代の集落、古代の城（怒田城）の跡も発見されています。1960年の調査では厚さ２ｍをこえるマガキ主体の貝層が検出されたそうです。「パイスケ（バスケットの訛といわれている）で４ｍも土を上げ、ノーパン(ク)のリヤカーで遺物を運んだ。」という岡本先生の話は、ユーモラスな中にも当時の発掘の厳しさと、それをものともされなかった意気込みを感じました。また、眼下の工場地帯が洪水に見舞われた際、縄文海進期の久里浜の入り江は、「かくあれかし」と思われたという話なども、この地、この遺跡をこよなく愛した氏ならではの事と、ひと言ひと言に重みを感じました。

遺跡につづく鬱蒼とした照葉樹林をぬけ、次の見学場所『高坂貝塚』へ。高坂小学校の石段で、参加者全員で記念撮影をしました。

昼食は『ペリー上陸記念公園』でとり、各自資料館を見学しました。

午後からは、県指定史跡『茅山貝塚』へ。ここは、縄文時代早期末の茅山式土器の標式遺跡として著名です。慈眼院の、ものすごく長く急な石段を目の前にして、ひるんでいる我々を尻目に、さすが通い慣れた道(？)。一気に登って行かれる岡本先生の後ろ姿に引かれるようにして遺跡に立ちました。幅狭な馬の背状台地の一角、わずか数ｍ四方が学史に輝く遺跡の調査区でした。1954年の調査で、茅山式は上層と下層に細分され、さらに野島式との編年も確認され、燦然たる成果を残しています。斜面には、貝層の一部が露出しており、雨で流された貝殻が下の方に白く堆積しているのが見えました。

この後、京浜急行で横須賀中央まで行き、縄文早期の埋葬人骨が発見されたことで有名な『平坂貝塚』を見学しました。ちょうど工事で露呈していた貝層を見ることができました。最後に『横須賀博物館』を見学し解散となりました。

わずか一日の行程で、これだけ著名な遺跡を巡ることができ、改めて三浦半島は遺跡の宝庫であることを実感しました。それにしても、今なお発掘当時の景観をとどめていることに驚かされるとともに、このように遺跡が保存されているということの陰には、地域の研究者の大きな努力があったことと思われました。そのような努力に改めて敬意を表したいと思います。いつまでも、一般の人々が見学できるような環境が保たれることを心から望むものであります。

次回の企画を心待ちにしています。

いま、草創期
―綾瀬市吉岡遺跡群の見学会―

岡本　孝之

吉岡遺跡群の草創期

２月２日㈰の神奈川県考古学会の第２回遺跡見学会は、綾瀬市吉岡で神奈川県埋蔵文化財センターが調査中の吉岡遺跡群で実施された。前々日の金曜日に降雪があり、せっかくの晴天にもかかわらず足元が悪く、残雪の風も冷たく、出足が心配されたが会員50名を含む200人もの人

第２回遺跡見学会

の参加があった。30万㎡にものぼる広い発掘地は中央に大きな谷が入り込み、そのために数地点に分かれ、発掘現場は遠く離れていたが、マイクロバスによる送り迎えがあり、通路にはゴザが敷かれて準備は万端であった。

吉岡遺跡群の調査は、２年前から始まっており、埋蔵文化財センター主催の見学会も１度実施されている。今回はローム層内の調査の成果が中心であった。現地見学は、すでに縄文時代草創期のローム層直上の面を掘り下げたローム層内の岩宿時代の調査地点であったが、展示された出土品で注目されるのはやはり縄文時代草創期の出土品である。150点にのぼる尖頭器らが発見されたＣ区、大小10点以上の神子柴型石斧が発見されたＡ区、複雑な地形の吉岡遺跡群の各地区は、縄文時代の草創期の新しい姿を示している。

相模野台地の草創期

相模野台地の縄文時代草創期は、全国的にみても注目されるところであろう。同じ綾瀬市内にある寺尾遺跡は、まとまった資料として最初の発掘調査であり、大和市上野遺跡らの調査へと続いた。草創期の調査研究は、次第に南部にのび、藤沢市の慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡、柄沢遺跡群、南鍛冶山遺跡などで良好な資料が発掘され、住居に関連する遺跡も相模原市勝坂遺跡や慶応ＳＦＣ遺跡などで発掘されている。遺物だけでなく、遺跡としての草創期が語れだしているのである。

神奈川県考古学会の草創期

今回の見学会は、ちょうど埋蔵文化財センターの１週間におよぶ吉岡遺跡群の出土品展・遺跡見学会を利用したものであった。多くの会員の参加があったことは喜ばしい。しかし、埋蔵文化財センターの挨拶や説明はあったが、神奈川県考古学会としてのものではなかった。それは、会がまだ始まったばかりの草創期であるゆえんのことなのかもしれない。小川さん、白石さんらのセンターの職員の多くは会員でもあり、その献身的な協力によって実施された見学会ともいえるが、センターの事業と考古学会の事業との区分けはしっかりすべきであろう。そうしてこそ、早期段階に進むことができる。

いま、草創期

吉岡遺跡群の草創期は、興味深い。相模野台地の草創期の遺跡が注目されている。点としての遺物・遺跡から群としての遺物・遺跡がおもしろい。こうなると周辺の関連する遺跡を一堂に集め、互いにその特色を表現したくなろう。そんな会を最も早期に実現するところはどこだろうか。考古学会だけでなく、考古学の研究に携わる様々な機関、団体が一歩前進し、一段階進むためにも、草創期の面白さをひろく市民のものとしたい。

★本学会会員数は1992年３月９日現在405名です。新年度会費（3000円）は講演会や総会時にも受けつけいたしますが、郵便振替（奥付をご覧下さい）にて随時御払い込み下さるようご協力お願いいたします。なお、大変恐縮ですが、緊急の場合を除き、事務局への連絡は郵便にてお願いいたします。≪事務局≫

情報案内

＜県指定＞

この度、厚木市登山（どうやま）１号墳出土埴輪84点他が神奈川県指定重要文化財に、また、茅ケ崎市堤（つつみ）貝塚が神奈川県指定史跡として、それぞれ指定されました。

そこで、今回はこれらについて概要をご紹介します。

登山１号墳出土埴輪

登山古墳群は厚木市飯山字登山1,648番地にあります。１号墳は1962年と1977年の２回にわたって赤星忠直氏によって調査され、周濠から多数の形象埴輪と円筒埴輪が発見されました。形象埴輪は家形埴輪や人物埴輪などで、６世紀中葉から後半のものと考えられ、その造形の美しさや種類の豊富さ、円筒埴輪の出土量の多さから、埴輪の出土量の少ない本県においては古墳時代を考えるうえで大変貴重です。

これらの埴輪は厚木市立寿図書館に保管展示されています。

堤貝塚

この貝塚は茅ケ崎市堤字南谷及び十二天にある、縄文時代後期前半の貝塚です。小出川の一支流に面する標高30数mの舌状台地の東西両斜面に貝塚が残され、指定されたのは西側斜面の一部です。

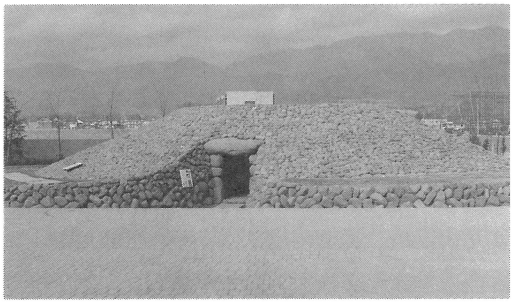
昭和54年に行われた発掘調査（担当者　岡本勇氏）では、貝層の下に石囲い炉、竪穴住居跡が確認されました。貝層は純鹹性のダンベイキシャゴを主体とし、南北35m、東西10mの広がりをもっていると推定されます。

この貝塚は相模湾沿岸に今日まで残されている数少ない貝塚であり、規模も大きく、保存状態も良好で、当時の人々の生活を知るうえで大変貴重な遺跡です。

＜施設案内＞

秦野市立桜土手古墳展示館

桜土手古墳群は、古墳時代後期の群集墳として35基の円墳が確認されています。これらのうち工場建設等の開発により、23基の古墳が発掘調査されています。古墳公園の他にも６基が保存され、合計12基の古墳が現存しています。



展示館は古墳群の一角に、保存された６基の古墳と復原した１基の古墳（写真）を中心にした古墳公園の中に、1990年11月に開設されました。本古墳群の出土遺物を中心に、秦野市の他の考古学資料も常設展示してあります。他には、映像室120インチのスクリーンによる「古墳の造営」と「古代人の祈り」を題とするオリジナル映像は子供達にも大変わかり易く、屋外の復原古墳と併せて効果的な展示の内容です。

交通案内（小田急線渋沢駅より徒歩20分か同線秦野駅の神奈中バス１番線より塚原橋下車徒歩５分、古墳公園前下車０分・行く先は別）「問い合わせ先」☎0463-87-5542・月曜休館日

考古学かながわ　第２号
発　行　神奈川県考古学会
発行日　1992年３月30日
編集者　伊藤　郭、川口徳治朗、小宮恒雄、後藤喜八郎、塚田順正
事務局　東海大学文学部考古学研究室内
〒259-12　平塚市北金目1117
郵便振替　横浜４－７１２０８
神奈川県考古学会
印刷所　東邦印刷株式会社